

50年間に及ぶ実践活動を振り返るとき、そこには多くの教訓を得たが、その中で、今とりわけ強く心に残ることは、「不易」でありたい、あるいは、あるべきではなからうか、という願いである。私はその文字をスクリーンに映し、説明を述べて講演のまとめとした。

不易^{ふえき}ということ

- ・ 一生忘れない感動を、自然からもらう
- ・ 他人に優しくする心を持つ
- ・ 全体のことと考えて、自分を主張する
- ・ 日本の伝統文化から学ぶ
- ・ 自分の課題、目標をもって人生を生きる

- 1 自然体験をした子どもたちは、どこかで、自然の美しさに感動した体験を持っている。「一生忘れない感動」と言う。このような体験を持っている子どもは、心の奥に、「豊かさ」がある。
- 2 集団寝食の体験をしたものは、人間関係の葛藤を通して思いやりの心を知る。

- 3 自然体験、集団生活体験により、子どもたちは、社会化を身につける。集団への順応と自己主張の力を身につける。
- 4 日本の伝統文化・太鼓を演じる子どもたちの姿に、私は、「日本人の血」をみるのである。すべての子どもの心が、目覚め、躍動している。偏狭な民族主義に陥るのでなく、子どもたちの精神の復活活動として、伝統文化の精神から学ぶ効果は極めて大きいと思う。
- 5 子どもたちの、個の体験を認め、それを尊重するところに、指導の出発点を置く。個の体験の中に問題意識、課題意識を見出させ、その課題解決に立ち向かわせる。そして、その成果を発表する機会を作っている。この体験こそが、その子どもの生きる力の基礎となる。

私は、以上の5つのことこそが、育てる会指導の、「不易」の理念ではなからうかと語った。思うに、子どもたちは、これから、善、悪、織り交ぜた膨大な情報化社会を生きていかなければならない。こうした中であって、子どもたちに、リテラシー(情報を取捨選択する力)をつけてやるのが、教育の重要な課題と言われている。

この課題への回答こそ、山村留学で培われる、「不易」の人間力であると言える。子どもの成長期の一定の時期に、この、不易の人間力をつけてやるのが、山村留学の使命であると信じる。

そして私は、すぐ前に座っている、現役の山村留學生たちに向かって話した。「この「不易」と言う言葉は難しい言葉であるけれど、君たちは山村留学で、この、「不易」というものを身に着けているのだと、と語ったことを覚えていてほしい」。そう語りかけて、私の講演のむすびとした。